

びんぼう神、借金返せ

高見 ゆかり

わたしのお父ちゃんはびんぼう神でした。でも仕事で失敗して、たくさんの借金を作ってしまい、引退することになったのです。

「ハル、今日からおまえがびんぼう神だ」

株式会社『カミサマ』の社長はえんま様です。

えんま様はわたしを会社に呼ぶと、太いまゆを寄せて言いました。

「びんぼう神としてのつとめを果たし、一日も早く借金を返すように」

お父ちゃんは、そのくらいたくさんの借金を会社に行っているのです。

「わかりました。がんばってお父ちゃんの方も働きます」

わたしはそう言ってぺこりと頭を下げると会社を後にしました。

さて、どの人間をびんぼうにしたらいいかしら？

びんぼう神の仕事は人間をびんぼうにする  
ことです。

うちは代々びんぼう神の家系で、おじい  
ちゃんの代までは優秀な神様として知られて  
いました。

でもおじいちゃんが引退して、お父ちゃん  
がびんぼう神になると、とたんにダメな神様  
として有名になりました。

なぜならお父ちゃんは人間をかわいそうに  
思って、なかなかびんぼうにすることができ  
なかったからです。

「お父ちゃん、仕事に情けは無用なんだよ」  
小さいころ、わたしはお父ちゃんの仕事に  
よく一緒について行きました。

「わかってる。わかってる。まあお父ちゃん  
にまかせとけ」

お父ちゃんは駅や公園や、人間がたくさん  
通る所に立って、どの人間をびんぼうにする

か品定をめします。

「うーん、あの人間は要領が悪い。ちよつとつづいたらすぐに大変なびんぼうになりそうなんだが」

子どもが六人もいるのにそれではかわいそうだと見送ってしまいます。

「じゃあ、あっちの人間は？」

わたしは顔の細い、キツイ顔立ちをした女の子を指さしました。

「あの人間は人をだましてお金持ちになったみたいだよ。だったらびんぼうにしてもいいんじゃないの？」

わたし達神様は、見ただけでその人のことや、してきたことがわかるのです。

「でもなあ、あの人は来年、親のいない子どもを引き取って、それからとても良い人になるんだよ」

それなのにびんぼうにしてしまったら、子どもを引き取ることが出来なくなる。良い人になる機会も失ってしまうじゃないかとお父

ちゃんと言うのです。

「お父ちゃん、そんなことを言っていたらだれもびんぼうにできないじゃない」

「いや、大丈夫だ、あの子にしよう」

お父ちゃんはそう言っていていきなり立ち上がると、目の前を通り過ぎた小学生くらいの男の子の後を追いかけてきました。

そしてその子がお菓子屋で財布を取り出した時に、気がつかないほどそっと肩をぽんと叩いたのです。

「あっ」

その瞬間、男の子がひめいをあげました。開いた財布からお金がこぼれ落ちて、あちこちに散らばっていったからです。

男の子は慌てて腰をかがめると、こぼれたお金をひろい集めはじめました。

「一枚、二枚：」

ようやく全部集めると手のひらの上で教え始めましたが、首をかしげています。

「あれ、十円たりないや」

でもまあいいかと、にっこり笑うとたくさんのお菓子を買って帰って行きました。

「お父ちゃん、今の仕事の稼ぎって」

「十円だ。あの子はたった今、十円びんぼうになったんだよ」

誇らしそうに言って十円玉を見せるお父ちゃんにわたしはあきれてしまいました。

びんぼう神の給料は、人間をびんぼうにしたのと同じ額です。

なのに十円とか五円ばかりではお米を買うこともできません。こうしてうちはどんどんびんぼうになっていったのです。

「おう、ハル。おまえんち、びんぼう神のくせにびんぼうでどうするんだよ」

隣の家に住んでいる福の神の子どものタキは、わたしを見るたびバカにしたように笑います。

「おれの父ちゃんかなあ、今月に入ってもう十人も人間をシアワセにしたんだぜ」

福の神の仕事はうちとは逆で、人間を幸せにすることです。

福の神に肩を叩かれた人間は、宝くじに当たったり、事故で命が助かったり運の良いことばかりが続きます。

「うちのお父ちゃんだって、今月と先月で二十人も人間をびんぼうにしたわよ」

「十円とか、五円とかな」

あ、一円もあつたつくとタキはぷぷと笑いながら言いました。

「本当におまえのオヤジ、びんぼう神に向けてないよな」

うちの父ちゃんの爪のアカでも飲むといひんじやないかと言うので、もう少しでわたしはタキを叩いてしまふところでした。

「見てなさいよ、今にわたしがびんぼう神になつて、たくさんの人間をびんぼうにしてみせるんだから！」

そしてそれは思いがけず早く来てしまったのです。

「ハル、すまないなあ」

はじめて仕事に行く朝、お父ちゃんはお母ちゃんと一緒に玄関でわたしを見送ってくれました。

「気をつけるのよ、ハル。お昼のお弁当をちやんと食べて、道に迷わないようにね」

「わかってる。もう心配性だなあ」

わたしは笑って手を振ると、元気に家を出ました。

となりの家の窓からは、タキがわたしをうらやましそうに見つめています。こんなに早く神様になれて仕事ができるわたしをうらやましく思っているのです。

「おい、ハル」

「なによ」

無視しようと思っていたのに大声で呼ばれて、仕方無くわたしはそちらを向きましました。

「間違っって、さかさ仕事をしないよにな」

からかうように言われて、ドキリとしました。さかさ仕事とは本来の仕事とは逆のこと

をすることです。

例えばびんぼう神なら、人間をお金持ちにしたり、幸せになるようなことをするのがさかさ仕事です。さかさ仕事をした神様は決まりを破ったということで一千万の罰金を取られてしまうのです。

実はお父ちゃんは、そのさかさ仕事をしてたくさんの借金を作ったのでした。

「そんなこと、あんたに言われなくてもわかっている！」

わたしはべーっと舌を出すともう二度とタキの方を見ないで歩きました。

わたしが向かったのは大きな駅の前にある広場です。

たくさんの人が行き来するし、座れる場所もあるので、びんぼうにする人間を捜すのにちようどいいのです。

(ここにもよくお父ちゃんと来たっけ)

日の当たる温かいベンチに座って、お父ち



やんと二人、一日中人間をながめていたのを  
思い出します。

（お昼になったらお母ちゃんが作ってくれた  
おにぎりを一緒に食べて、楽しかったなあ）

そこまで考えてわたしはふるつと頭を振り  
ました。

（ダメダメ、そんなのんきなことをしていた  
から、うちはびんぼうになったんじゃない）

えんま様にもこれ以上借金を増やさないよ  
うにとしつかりクギをさされています。

がんばって仕事をして、お父ちゃんの借金  
を早く返さなければいけません。

（もう今日はお昼の前に絶対に一人はびんぼ  
うにする。そう決めた！）

わたしは決心すると、あたりをぐるうりと  
見回しました。

ところがいざ誰かをびんぼうにしようと思  
うと、これがなかなかむずかしいのです。

わたしが肩を叩くことで、その人間がお金  
を失うのだと思うと、どうしても一人を選ぶ

ことができないのです。

（びんぼう神は人間をびんぼうにするのが仕事なのよ）

おじいちゃんだって昔言っていました。

『おまえのお父ちゃんは優しすぎて人間をびんぼうにできないようだが、びんぼうは決して悪いことでは無いんだよ』

『どうして？ おじいちゃん』

『人間はな、良いことばかりが続くと、ありがたいと思う気持ちをすぐ忘れる。そして充分幸福なはずなのに、もつともつと欲が深くなつて結局不幸せになつてしまふんだ』

だから時々びんぼうにしてやったほうが、ずっと幸福に暮らせるのだと、おじいちゃんはおわたしにそう言ったのです。

（そうだよね、くじびきがみんな当たりだったら、当たつてもちつともうれしくないものよ）

たまに当たるからこそ『当たり』がとつてもうれしく感じられるのです。

「あの人：」

ふと、わたしは前を通り過ぎて行った人間に目をやりました。

急ぎ足で歩いて行ったその人間は若い女の人で、カバンにはアルバイトをしてもらったばかりのお金が入っていました。

（そのお金で新しい洋服を買いに行くんだ）  
わたしがそっと肩を叩けば女の人は財布を落として、欲しかった服を買えなくなるでしょう。

（でもそのくらいなら、べつにいいよね）

住む家がなくなったり、アルバイトをクビになったりするわけではありません。

わたしは気持ちが軽くなるのを覚えると、その人に向かって走って行きました。

ところが、もう少しで肩に手が届くという所で別の誰かがその人の肩を先に叩いてしまったのです。

「あつ、ダメっ」

わたしが悲鳴のように言うと、その誰かが

くるりと振り向きました。

「なんだ、びんぼう神の所の娘じゃないか」

それは青黒い顔色をした、疫病神という神様でした。

「そういや、代替わりしたんだったな。悪いがこういうものは早いもの勝ちだから」

疫病神の仕事はびんぼう神と似ています。

人間を不幸せな目にあわせるのです。

すぐに女の人はころびました。

「きやつ」

見るとハイヒールのかかたがぽつきりと折れてしまっています。

それだけではありません。転んだ所には水たまりがあつて、着ている服がびしょぬれにぬれてしまいました。

「ほうほう、まだまだ不幸は続くぞ」

疫病神は楽しそうに女の人を見つめています。

「まったくもう、なんなのよ」

ぷりぷりと怒りながら立ち上がった女の人

は、そのとたん後ろから歩いて来た人にぶつかりました。

あっと思う間もなくバッグが落ちて、中に入っていたお化粧の道具や財布、携帯電話などが辺り一面に散らばりました。

「あっ」

財布は通りがかった人に蹴飛ばされて、どこかに行ってしまった。口紅は踏まれてケースが割れてしまいます。ハンカチは風に飛び、それをひろおうとした女の人は思いきり手を踏まれてしまいました。

「鍵もどこかの隙間に入ってしまったな。あの人間、家に入れ無くてさぞ困るに違い無い」

疫病神は満足そうに笑いました。

「ひどいじゃない」

わたしは思わず疫病神にくっついてかかりました。

「なんだい、さっき言っただろう、仕事はみんな早い者勝ちだ。もしおまえが先にあの人

間の肩を叩いていたとしても、おれは文句な  
んか言わないよ」

せいぜい次はがんばるんだなと言って、疫  
病神は肩をすぼめると、どこかに行ってしまった。  
いました。

「違う」

ぼんやりと立ち尽くしていたわたしは、や  
がてぽつりとつぶやきました。

だって別に仕事を横取りされた文句を言い  
たかったわけではないからです。

わたしはただ、あんなにひどい目にあわせ  
なくてもいいのではないかと言ってやりたか  
ったのです。

女の人はもういません。疫病神が去ったの  
であれ以上悪いことは起きないでしょう。

でも次々と起こる悪い出来事に、泣きそう  
になっていたあの顔は、今もすっかりと目に  
焼き付いています。

「わたしがびんぼうにしたら、あの人間は同  
じように悲しそうな顔をしたのかしら」

そう思うと胸の奥がずんと重くなり、仕事を  
する気持ちがするするとしぼみました。

そして結局その日、わたしはだれもびんぼ  
うにできないまま家に帰りました。

だれの肩を叩いても、あの女の人と同じよ  
うに悲しそう顔をするかと思ったたらだれも  
選ぶことが出来なかったのです。

「よう、ハル。今日はどれくらい仕事してき  
たんだ」

とぼとぼと帰ると、家の前にはタキがいて、  
わたしのことを待ち構えていました。

「うちの父ちゃん今日は四人、シアワセにし  
たんだぜ。おまえは今日、何人びんぼうにし  
たんだよ」

「知らない」

するとタキは、にやつと意地の悪い顔で笑  
いました。

「さてはおまえ、一人もびんぼうにできなか  
ったんだな。おまえんち、父ちゃんもダメな

からおまえもダメなんて、びんぼう神失格だな」

「うるさい、うるさい、うるさいっ」

カツと熱い物が喉の奥からこみあげて、わたしはタキに向かって思いきり怒鳴ると、そのまま家の中に駆け込みました。

「どうしたんだい、ハル」

泣きそうな顔で飛び込んできたわたしに、お父ちゃんがびっくりしたように言いました。

「なにか嫌なことでもあったのかい？」

「なんでもないっ」

やさしいお父ちゃんの顔が、今はなんだかとてもイライラします。

「どうしたの？ 仕事がうまくできなかったの？」

お母ちゃんも心配そうに言ったけれど、わたしは返事をしたくなくて、そのまま部屋にとじこまりました。

最後にやって来たのはおじいちゃんです。



おじいちゃんはそつと部屋に入ってくると、  
布団にもぐっているわたしのそばに座りまし  
た。

「ハル、気にするな。初日からうまくできる  
やつなんていないさ。えんま様もその辺はち  
やんとわかってらっしゃるよ」

ぽんぽんと布団に上を叩かれて、わたしは  
がばつと起きあがりました。

「おじいちゃん、わたしダメなびんぼう神な  
のかもしれない！」

「何があつたんだい？」

「今日、びんぼうにしようとした人間がいた  
の。でもその人間は先に疫病神に肩を叩かれ  
てしまった」

それから後のことをわたしはおじいちゃん  
に話しました。

「わたし、それをひどいって思っちゃった。  
かわいそうって」

「そうだな。確かにその人間にとっては災難  
だっただろうな」

「でもそれが疫病神の仕事でしょう？ わたしだってあの人間をびんぼうにするつもりだったのに」

なのに他の人の仕事をひどいと思っってしまった。

そして人間の悲しそうな顔が胸に刺さって、誰を選ぶことも出来なくなってしまったと言おうわたしの話をおじいちゃんはずきながら聞いてくれました。

「お父ちゃんと一緒の時は、どうしてお父ちゃんの仕事をしないんだろうって思ってた。でもわたしもお父ちゃんと同じなんだ。人間がかわいそうで、びんぼうになんかできない」

「ハルはお父ちゃんに似て、優しいからなあ」

おじいちゃんはそう言って、わたしの頭を撫でてくれました。

「さっきタキに言われたの。お父ちゃんもわたしもびんぼう神失格だって。本当にそうだ

よね、わたしきつと神様に向いてないんだ」

言いながらぐっと喉の奥がつまりました。

悲しくて涙がこみあげてきたからです。

「よしよしハルよ。そんなに思いつめるものじゃない。たしかにわたしの仕事は人間をびんぼうにすることだが、だからと言って、むやみやたらにびんぼうにすれば良いというわけじゃないんだ」

わたしはおじいちゃんの言葉に目を見張りました。

「わしら神様は人間がいてこそ仕事ができる。だから人間が生きていけなくなるくらい不幸せにしてはいけないんだよ」

「じゃあ疫病神は？ 疫病神は人間にひどいことをしているじゃない」

「疫病神だって同じだ。おまえから見たらひどいことでも、本当に恐ろしい厄を授けることはないんだよ」

そしておじいちゃんは言いました。

「おまえのお父ちゃんは確かに、びんぼう神

の仕事が上手じゃなかったかもしれない。でも、どんな人間をどれだけびんぼうにしたらいいのか、それだけはちゃんと見極めてやっていた」

まあ、それでもいざとなるとやっぱりかわいそうになって手心を加え、ほとんどびんぼうにできなかつたわけだがと、おじいちゃんには苦笑いをしながら言いました。

「それをバカにする者だっているだろうさ。でもわしは、そんなびんぼう神がいたっていいんじゃないかと思うよ」

「びんぼうなびんぼう神でも？」

「ああ。びんぼうなびんぼう神でもだ」

きつぱりとしたおじいちゃんという言葉にわたしは気持ちがつつと楽になりました。

（そうか、無理に人間をびんぼうにしなくてもいいんだ）

お父ちゃんよりはたくさん。でも悲しい顔にならないくらいびんぼうにするなら、わたしにもできるかもしれませぬ。

「でも一つだけ気をつけるんだぞ」

「なに？」

「さかさ仕事だけはしないように。これ以上借金が増えたら、もううちでは払いきれない。

びんぼう神をクビになってしまいかもしれないからな」

「わかった」

わたしはきゅつとくちびるを引き結ぶと、おじいちゃんに大きくうなずきました。

次の日からわたしは、少しずつですが仕事ができるようになりました。

町の中をあちこち移動しながらよく見極めて、びんぼうにする人間を選ぶようになったのです。

（あの男の人は今日が誕生日なんだ）

じっと見ていると、その人のことがわかります。

（朝からたくさん『おめでとう』って言われて、夜にはお祝いのパーティーがある）

この人なら少しくらいびんぼうになっても大丈夫でしょう。

わたしは駆け寄ると、気づかれ無いように男の人の肩をそっと叩きました。

そのとたん、男の人のカバンのひもが壁から出ていたくぎにひっかかりました。

「あーっ」

ひもはぶちりと切れてカバンが地面に落ちこちます。

「誕生日だったのにツイてないなあ」

男の人はびっくりしたような顔で立ち止まるとカバンを拾い上げましたが、そんなに悲しそうな顔はしていません。

「まあ、お祝いに新しいカバンを貰うことになっっているからいいんだけど」

パンパンとほこりを払うと男の人はカバンを大事そうに抱えてまた歩き始めました。

「よう、今のは幾らのもうけになるんだ？」

近くにいた疫病神がわたしに聞きました。

「五百六十円。あのカバン、結局捨てないで修理に出して直してもらおうことになるの。その修理のお金が五百六十円だから」

「ケチくさいもうけだな」

でもオヤジよりは稼いでいるかと疫病神は言いました。

「おじさんはどれくらい仕事をしたの？」

「おれか？ おれはもう三人、肩を叩いた」

太った男の人間と、赤い靴をはいた女の間と、ついさつき、うさぎのぬいぐるみを持った小さな子どもの人間の肩を叩いたと疫病神は自慢そうに言いました。

「子供の肩も叩いたの？」

「なに、そんな非道いことにはならないさ。せいぜい転んでぬいぐるみを落として、大事なうさぎが汚れるくらいだ」

それでもきつとその子は悲しい顔になるでしょう。わたしは少し心配になりました。

「大丈夫だって、ほら見てみる、あの子どもだよ」

疫病神が指さす方には、髪の毛にリボンを結んだ小さな女の子がいました。

女の子は顔がかくれそうなくらい、大きなうさぎのぬいぐるみを抱えています。

（あのウサギ、鉄棒ができるようになったごほうびにお母さんに買ってもらったんだ）

そしてそれをこれからバスで帰って来るお父さんに見せるつもりなのです。

「あっ」

女の子を見つめていたわたしは思わず大声をあげてしまいました。ちらりと見えた未来の中にとんでもない光景があったからです。

「おじさん大変！ あの子これから事故にあうよ」

「そんなはずは無い。おれはそこまで非道い厄を授けたおぼえは：」

疫病神は目を細めると女の子をじっと見つめました。そしてすぐに青黒い顔色をもっと青く、もっと黒くさせたのです。

「しまった！ 読み間違った。これじゃ、あ



の子は死んじまう」

わたしはこくりとうなずきました。

女の子はバス停の近くまで来た所で小さな出っ張りにつまづいて転び、そのはずみでうさぎのぬいぐるみを落としてしまふのです。

そこまでは疫病神が言ったのと同じです。でもその後があるのです。

うさぎのぬいぐるみは思いがけず遠くに飛んで、道路に落ちます。立ち上がった女の子はそれを見つけると、ぬいぐるみめがけてまっしぐらに走って行くのです。

(そこにバスが走って来るんだ)

女の子はやって来たバスの真ん前に飛び出してしまうことになるのです。

「助けてあげられないの？」

わたしは疫病神に聞きました。

「おれにさかさ仕事をしろと言うのか」

疫病神はうめくように言いました。

「人、一人分の命の代金だぞ。どれくらいになると思うんだ！」

「じやあ福の神。タキのお父さんに助けて貰えない？」

「福の神は今日は隣町で仕事をすると行ってた。とてもじゃないが間に合わない」

女の子はぬいぐるみを抱えたまま、バス停に向かって行きます。

「：わたし」

「バカなことを考えるなよ。おまえの家はそうじゃなくてもたくさん借金があるんじゃないか」

そうです。これ以上借金が増えたら、びんぼう神をやめさせられてしまうかもしれないのです。

「どうしよう」

もう女の子はバス停についてしまいました。わたしは真っ青になりながら、ぎゅっと手を握りました。

（やっぱり、見捨てるなんてできない）

助けようと、わたしが走りだそうとした時でした。ふいに聞き覚えのある声があったので

す。

「おい、ハル。疫病神なんかと何やってんだ。今日は少しは稼げたのかよ」

タキでした。タキがにやにやと笑いながら、こちらに向かって歩いて来るのです。

「：タキ」

「おれの父ちゃん、今月すごくたくさん仕事をして、えんま様にボーナス貰ったんだぜ、おかげでおれも小遣いもらっちゃってさ、これからお菓子を買いに行くんだ」

言いながらタキは、ぷっくりとふくらんだ財布をもちあげて見せました。

その時です。わたしはピンとひらめきました。た。

「タキ、ごめんっ」

わたしは全力で走るとタキの側に行き、ポンとその肩を叩きました。

タキがびっくりした顔になるのと、持っていた財布の口が、ぱかっと開いたのは同時でした。

「わっ、わっ、わっ、何するんだ、ハルっ」  
財布からは金色のお金がこぼれ落ちます。  
ころりころりと転がったお金は女の子の足  
元にも転がりました。

ぴかぴかに磨かれたお金は太陽の光を弾き、  
きらりと輝きます。女の子は、はっとしたよ  
うに立ち止まりました。

「：おかね」

女の子はうさぎを抱いたまま、ゆっくり屈  
み込むとお金をひろいあげました。

そして情けない顔で一生懸命お金を拾い集  
めているタキを見つけると、くるりと後ろを  
向いてその側にいったのです。

「はい。これお兄ちゃんのおかね？」

「あ、ああ、うん」

その時、バス停にバスが停まりました。

開いたドアから人間がたくさん下りて来ま  
す。その中の、背の高い男の人が女の子の所  
にまっすぐに歩いて行きました。

「ただいま」

「あ、おとうさん、おかえりなさい」

女の子は、嬉しそうに笑うとその人に飛びつきました。

(よかった)

わたしと疫病神はほっとした気持ちで女の子とお父さんを見つめました。

わたしはこの日、三百六十円稼ぎました。

タキの財布からこぼれてどこかに行ってしまった分です。

「おまえのこと、絶対にゆるさないからな！」

タキは肩を叩いたことを怒っていて、今もわたしを見るとにらみつけて来ます。

えんま様にも神様相手に仕事をしてはいけないのだと厳しく注意されてしまいました。

でもわたしはへっちゃらです。だってさかさ仕事をしないでも、あの女の子を助けることができたのですから。

「なあ、びんぼう神の娘よう」

駅前のベンチでお昼のおにぎりを食べていると、疫病神が話しかけて来ました。

「なに？ おじさん」

わたしと疫病神はあれから仲良くなって、時々一緒にお昼ごはんを食べるようになっていました。

「あん時の福の神のせがれの顔、おかしかつたなあ」

カカカと笑う疫病神にわたしもにこっと笑い返すと、おにぎりを差し出しました。

「うん、いつもはあんなに威張ってるのに、泣きそうな顔をしていたよね」

相変わらずわたしの稼ぎはあまりよくありません。人間が不幸せにならないように見極めて少しだけびんぼうにしているからです。うちの借金はまだまだたくさんあって、返し終わるのには何百年もかかるでしょう。

（でもいいんだ）

前とはちがって、わたしは落ち込まなくな

っていました。

「びんぼう神、早く借金を返せよ」

えんま様には時々せつつかれることもありますが、びんぼうなびんぼう神も悪く無いと  
そう思うようになったからです。  
（終）